

フライブルク詣のはじまり

満原 健
(京都大学)

序

高橋里美はフッサールのもとへ留学した時期のことを回想した随筆で、フライブルクに留学した日本人として田辺元や小山鞆絵ら 10 人以上の名を挙げている¹。『フッサール年代記』にも 1920 年代にフッサールの講義・演習に参加した日本人留学生として伊藤吉之助、田辺元、宮本和吉ら 10 名以上の名前が記されているほか²、1930 年からは尾高朝雄らと個人的な交流を持ったとの記述がある³。ほかの証言に登場する人物を加えると、1920 年から 1930 年初頭にかけてフライブルクに留学した日本人は、相当な数にのぼると思われる⁴。

フライブルクは当時の日本の哲学者にとって哲学の聖地のような位置づけをされていたこと、フライブルクへの留学が非常に流行していたことから、「詣でる」という日本語と流行を意味するドイツ語の「Mode」を掛け合わせて、この現象は「フラ

1. 高橋里美「フッセルのこと」『高橋里美全集』第4巻、福村出版、1973年、142ページ。

2. Karl Schumann, *Husserl-Chronik*, Den Haag, 1977, S. 259, 269, 285-286, 305, 332.

3. *Ibid.*, S. 325, 371, 374, 384, 392, 406, 407.

4. フッサールの書簡集 (Edmund Husserl, *Briefwechsel*, 10 Bände, Dordrecht Boston London, 1994) にもさまざまな日本人が登場する。また、井上哲次郎、桑木巖翼と土田(下の名前は不明)がフライブルクのフッサールと会って話をしたと伝えている(「海外通信」『哲学雑誌』第37巻第428号、1922年、1025ページ。桑木巖翼「外遊旅行談」『哲学雑誌』第42巻第483号、1927年、449ページ)ほか、円谷弘と千葉命吉もフッサールの講義に出たと述べている(円谷弘『社会学徒の描く世界』、社会学徒社、1928年、79-82ページ。千葉命吉「新生動主義とは何ぞや」『教育学術界』第48巻第2号、1923年、150ページ)。

イブルク詣」と呼ばれる⁵。このフライブルク詣組のなかから、いわゆる京都学派の一員として独自の思索を形成した者のほか、現象学の日本への紹介に努めた者、後進の日本人現象学者の育成に寄与した者が生まれている。そのため、このフライブルク詣が日本における現象学の受容と発展にとって重要な出来事であったことは間違いない。

しかし、その実態については研究が進んでおらず、判明していないことが多い。誰がどの期間にフライブルクに滞在したのか、彼らはなぜフライブルクに行ったのか、そこで何を学び、どのような影響を受け、どのような寄与を日本の哲学にしたのか、分かっているのはごく一部にすぎない。本論文ではこのフライブルク詣という事象を解明する第一歩として、それを引き起こした要因を明らかにする。

1. 1910年代の日本の認識論

1-1. 1910年代の日本への新カント派の認識論の受容

1877年に東京大学が設立されてからしばらくの間、日本への認識論の紹介は、観念論と実在論、経験主義と合理主義という対立と、それを克服したものとしてのカント、という図式にもとづいて進められていた。19世紀の終わりごろになると、それとは異なる最新のものとして、中島力造、桑木巖翼、西田幾多郎、田辺元によって心理主義的な認識論が日本に広まっていく⁶。

しかし1910年代になると、その状況は変わる。西田は1911年に論文「認識論に於ける純論理派の主張に就いて」で、「实在ということから全く離れて真理の基礎を立てようとする」(N1:169) ヴィンデルバント、リッカート、フッサールら純論理派と、「純粹経験ということをも唯一の立脚地として論理的価値の問題をも之から論じようとする」(同) 心理派との対立を紹介したあと、それまでとは異なる主張をしている。すなわち、西田は心理派を擁護しつつも、経験ではなく純粹統覚に知識の客観性の基礎を求めるカント主義と自身の立場を重ね合わせはじめるのである (N1:172, 175,

5. 管見のかぎり、「フライブルク詣」という言葉がはじめて登場する文献は高橋里美「フッセルのこと」(『思想』第89号、1929年、196ページ。『高橋里美全集』第4巻、福村出版、1973年、147ページ)である。

6. 彼らによる心理主義的な認識論の日本への受容については、拙論「西田幾多郎の純粹経験概念と実証主義の認識論」(『哲学研究』第610号、2023年)、「明治期の日本における桑木巖翼の認識論」(『求真』第28号、2023年)、「西田幾多郎『善の研究』と田辺元「措定判断に就いて」」(『求真』第29号、2024年)で論じた。

182-183)。

西田の後を追うようにして、田辺も超越論主義への支持を表明しはじめる。1914年の「認識論に於ける論理主義の限界」では、リッカートなどの「論理派の立場には躰える事の出来ない限界がある」(T1:29)と指摘されつつも、「経験的心理主義というものは勿論哲学としての認識論の正当なる方法たる事は出来ぬ」(同)と、経験主義、実証主義、心理主義は明確に退けられている。さらに1915年の『最近の自然科学』では、「余が知識哲学の唯一正当なる立脚地と信ずる所の、カントの先験論をフェノメノロジーに由って改造発展し、論理主義に直観、体験の基礎を与え、単なる価値の理想主義に対し、实在根拠を発見するという見地に立つ」(T2:5)と述べられている。リッカートらの論理主義は現象学によって補足される必要があるという留保つきではあるが、ここでは明確に、超越論主義が唯一正当な認識論上の立場であると主張されている。

同じ時期に、新カント派の哲学の紹介も進む。1900年にはすでに教育学に関するナトルプの著作を解説する書物が⁷、1901年には「カントへ帰れ」というスローガンを掲げた初期の新カント派についてわずかながら紹介した記事が登場する⁸。続いて1902年には、ヴィンデルバントの『哲学史』(*Geschichte der Philosophie*, 1892)を抄訳したものや⁹、パウルゼンの著書『哲学入門』(*Einleitung in die Philosophie*, 1892)に依拠した哲学解説書などが出版される¹⁰。

日本語で新カント派をはじめて主題的に扱った論文は、藤井健治郎の「テレオロジーの可能及び意義に就いて」(1908年)だと思われる。続いて、1909年に留学から帰国した桑木巖翼¹¹が「歴史哲学の問題」(1910年)¹²、「美学上の規範」(1910年)¹³でヴィンデルバントやリッカートを論じはじめるほか、当時唯一の哲学の専門誌だった『哲学雑誌』上にも、宮本和吉「最近独逸哲学の趨勢」(第27巻第301-302号、

7. 中谷延治解説『ナトルプ氏へるばると、ペスタロッチ』、育成会、1900年。

8. 波多野精一「十九世紀の独逸哲学大家」『哲学雑誌』第60巻第175号、1901年。

9. ウィンデルバント『哲学史要』、桑木巖翼抄訳、早稲田大学出版部、1902年。

10. 朝永三十郎『哲学綱要』、宝蔵館、1902年。

11. 「雑録」『哲学雑誌』第24巻272号、1908年、1016ページ。

12. 桑木巖翼『哲学綱要』(東亜堂書房、1913年、273ページ)では、この論文は1909年2月の講演にもとづくと書かれている。しかし、そのときにはまだ桑木は帰国していないため、誤記だと考えられる。1910年3月発行の『彙報』『考古界』(第8編第12号、539ページ)には、2月にこの題で桑木の講演が行われたとの記述がある。

13. 「歴史哲学の問題」と「美学上の規範」は共に『哲学綱要』(東亜堂書房、1913年)に所収。ただし、後者は「規範と規範学」に題が改められている。

1912年)、同「マールブルヒ学派とハイデルベルヒ学派」(第28巻第320号、1913年)、小尾範治「輓近の独逸哲学」(第29巻第329号、1914年)など、新カント派を紹介する記事が多く登場するようになる¹⁴。同じ頃、心理主義からカント主義へと立場を変えた西田が論文「論理の理解と数理の理解」(1912年)、「自然科学と歴史学」(1913年)で、田辺が「独逸唯心論に於ける哲学的認識の問題」(1918年)、「『意識一般』に就いて」(1919年)などで新カント派について論じている。

さらに1916年には、1913年に留学から帰国した朝永三十郎が¹⁵、『近世に於ける「我」の自覚史』を出版し、その章の一つで主にヴィンデルバントの哲学を紹介している。次の1917年には、リッカートがいたフライブルクなどで学んだ経済学者左右田喜一郎が一章を割いてリッカートの議論への反論をした著作『経済哲学の諸問題』を、桑木巖翼がカントのほかヴィンデルバントの哲学について議論した『カントと現代の哲学』を公刊したほか、西田幾多郎が新カント派やフッサールら数多くの哲学者に言及した著作『自覚に於ける直観と反省』を発表している。

このように1910年代の日本では、さまざまな人物が新カント派について議論するようになっていた。この時期の日本の哲学界の状況について、三木清は「誰もヴィンデルバント、リッケルトの名を口にするようになった。日本における新カント派の全盛時代であった」(M1:398)と回顧しているほか、ドイツ語で書かれた論文「日本哲学におけるリッカートの意義」(„Rickerts Bedeutung für die japanische Philosophie“)で、「リッカートは日本で流行 (Mode) になっている」(M2:46)と述べている。1910年代の日本では、新カント派の哲学に著しい注目が集まっていたのである。

1-2. 1910年代の日本へのフッサール哲学の受容

フッサール哲学の日本への受容も、この1910年代にはじまる。すでに1892年と1893年の『哲学雑誌』の新著紹介欄には、フッサールの『算術の哲学』が掲載されている¹⁶。またフッサールが„Alte und neue Logik“という題の講義をしていることが1908年に紹介されている¹⁷ほか、1910年にはドイツで著名な哲学者の一人としてフ

14. 桑木巖翼は、新カント派研究が日本で盛んになった原因として、ヤコビーという人物が来日して新カント派について講演をしたことを挙げている。桑木巖翼「日本に於ける独逸哲学」(『西周の百一新論』、日本放送出版協会、1940年)、165-166ページ。

15. 「彙報」『東亜の光』第8巻第2号、1913年、106ページ。

16. 「新著」『哲学雑誌』第7巻第70号、1892年、567ページ。「新著」『哲学雑誌』第8巻第75号、1893年、1070ページ。

17. 「雑録」『哲学雑誌』第23巻第262号、1908年、1336ページ。

フッサールの名が挙げられている¹⁸。しかしこれらの記事では、フッサール哲学の内容は紹介されていない。

フッサールの主張にはじめて言及した日本語の記事は、1911年6月と7月に出版された田辺による書評「イェルザレム氏の『批評的観念論と純粹論理学』」である。この書評からは、フッサールが『論理学研究』第一巻で展開した心理主義批判は独断にもとづいており、第二巻の認識の現象学は発達史の見解が欠如した不完全な叙述的心理学にすぎないというイェルザレムの批判を通して、フッサールの思想をうかがい知ることができる (T14:18, 24-25)。論文として最も早くフッサールの哲学に言及したのは同じ1911年8月と9月に発表された西田の「認識論に於ける純論理派の主張に就いて」であり、ここではヴィンデルバントやリッカートと同じ純論理派の一人として、フッサールの名が挙げられている (N1:169, 179)。その後は、伊藤吉之助による「厳密学としての哲学」 („Philosophie als strenge Wissenschaft“, 1911) の翻訳¹⁹、西田が1915年に京大で行った講義²⁰、得能文が1917年に東大で行った講義²¹などを通して、フッサール哲学の日本への受容が進んでいく。

1914年には、現象学を研究する哲学者が増えたために『哲学及び現象学的研究年報』が発刊されたことを伝え、その内容をわずかながら紹介する記事が現れているため²²、現象学にも一定程度の関心が寄せられていたと考えることはできる。しかし、この時期にフッサールの思想を解説した記事のほとんどは、フッサールは論理主義に属するというごく短い紹介をただけ、現象学をやっているというごく端的な説明をそれに付け加えただけにとどまっている²³。ヴントの論文 „Psychologismus und Logizismus“ を訳した上野直昭「ヴント『心理学に於ける論理主義』」(1915年)では例外的にフッサールの哲学について長めに言及されているものの、そのほかは、エヴ

18. 桑木厳翼「欧米哲学界の印象」『教育学術界』第20巻第6号、1910年、697ページ。

19. 伊藤吉之助「フッサール「学としての哲学」」『哲学雑誌』第30巻第343-356号、1915年。

20. 「彙報」『芸文』第6年第10号、1915年、114ページ。

21. 「彙報」『東亜の光』第12巻第10号、1915年、77ページ。

22. 「近事片々」『哲学雑誌』第29巻第323号、1914年、93ページ。

23. たとえば以下のものがある。紀平正美『認識論』、岩波書店、1915年、189-190ページ。朝永三十郎『独逸思想と其背景』、東京宝文館、1915年、212ページ。得能文「現代の哲学」『教育学術界』第34巻第6号、1917年、645-646ページ。他に、フッサールの現象学は心理学と完全には分離できていないと非難するリッカートの論文「認識論の二途」 („Zwei Wege der Erkenntnistheorie“, in *Kant-Studien*, Band 14, 1909, S. 227) が、1916年に中川得立による翻訳で出版されている (リッケルト『認識の対象』、中川得立訳、岩波書店、1916年、488ページ)。

アルトの記事²⁴を介して『イデーニ I』の現象学を解説した高橋里美の論文と²⁵、1915年の講義をもとにしたと思われる西田幾多郎の論文「現代の哲学」および概説書『現代における理想主義の哲学』しか見当たらないうえ、フッサール哲学の解説にはどれも2ページから4ページほどしか割り当てられていない。

西田は、その限られた分量のなかで、日本で初めてフッサールの現象学に肯定的評価を与えた人物である。西田の考えでは、主観と客観を互いに結びつけたものとして捉えるのが具体的に正確な理解であり、両者が相互に独立して存在するという理解は誤っている (N1:64-67)。しかしリッカートは、認識の対象となる意味や価値、当為は超時間的なものであり、時間的な心の作用から独立しているという論理主義的な主張をしているうえ、両者がどのようにして結びつくのか、時間的なものでしかない我々の心の働きがどのようにして意味や価値、当為という超時間的なものを対象として認識することができるのか、という問題の解決を放棄している²⁶。そのため西田はリッカートを批判し、この問題の解決を目指して『自覚に於ける直観と反省』(1917年)を執筆しはじめる (N1:176, 185-187, N2:3, 5)。その『自覚に於ける直観と反省』で西田はフッサールを評価して、「意味 *Bedeutungen in specie* は意味作用 *Akte des Bedeuten* の一能率 *ideal gefasste Momente* である。最も直接的な具体的実在はフッサールの所謂有意味体験 *intentionales Erlebnis* という如きものであろう」(N2:108)と述べている。リッカートが意味を我々の心的作用から独立した対象として理解しているのに対し、フッサールは意味を作用から切り離せない構成要素としており、主観と客観を互いに結びつけたものとして捉えている点を、実在を具体的に把握できているとして、西田は肯定的に受け止めているのである。

もちろん、フッサールに対する批判もなされている。実在を自己発展するものと考えた西田にとって、『論理学研究』や『イデーニ I』で分析されている志向的体験の姿は静的にすぎるため、「氏の如き方法によって、直接流転の世界に於ける関係を表すは不可能であると思う」(N1:291-292)とされているのである。しかし西田によれば、この流転する実在の世界についての最も透徹した理解をしているベルクソンは、認識論については「極めて粗笨にして幼稚」(N1:291)な水準のものしか提示していない。代表的な認識論者であるリッカートは、上述のように実在についての理解に問

24. Oscar Ewald, "German Philosophy in 1913", in *The Philosophical Review*, vol. 23, No. 6, 1914.

25. 高橋里美「最近の独逸哲学界」『法華』第2巻第3号。高橋里美『高橋里美全集』第7巻(福村出版、1973年)所収。

26. Heinrich Rickert, „Zwei Wege der Erkenntnistheorie“, in *Kant-Studien*, Band 14, 1909, S. 222-223.

題がある。それに対してフッサールの現象学は、認識論においてベルクソンよりはるかに精緻なものとなっているだけでなく、実在の把握という点でリッカートよりも優れている。そのため西田にとって現象学は、不十分な点はあるものの、総合的に見れば、当時の有力な哲学のなかで最も評価されるべきものだったのである。

このように現象学の独自性と価値を認める西田から影響を受けて、田辺が『最近の自然科学』（1915年）で、カントの超越論主義を「改造発展し、論理主義に直観、体験の基礎を与え、単なる価値の理想主義に対し、実在根拠を発見する」（T2:5）ところに現象学の意義を認め、「普遍に就いて」（1916年）などでフッサールにたびたび言及するようになる。ほかに、西田のもとで哲学を学んだ土田杏村が、現象学を方法として採用した日本初の著作『象徴の哲学』を1919年に出版するなどしている。現象学を肯定的に評価する人物は、徐々に増えつつあったと言える²⁷。

しかし、新カント派より現象学のほうが1910年代の日本に広まっていたとは言えない。以下の図1は、1910年から1929年にかけて、当時の日本で発行されていた哲学の学術雑誌である『哲学雑誌』（1887-）²⁸と『哲学研究』（1916-）に掲載されている論文²⁹のうち、ヴィンデルバント、リッカート、ラスク、コーヘン、ナトルプ、カッシーラーの新カント派に言及している論文数、リッカートに言及している論文数、フッサールに言及している論文数をそれぞれ調べてグラフにしたものである。

27. この時期の田辺と土田による現象学理解および受容については、Mitsuhara Takeshi, “The Rise of Japanese Phenomenology”, in *European Journal of Japanese Philosophy*, vol. 10, 2025 にて論じた。

28. 1892年の第6冊第63号までは『哲学会雑誌』。以後『哲学雑誌』に改名。

29. 「批評紹介」「雑録」など、二段組となっている記事は計上していない。

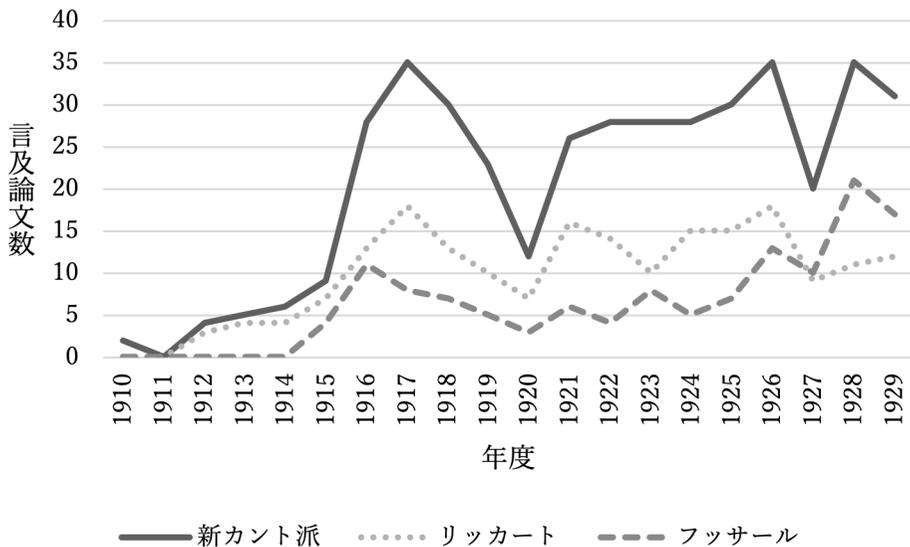


図1 人物別言及論文数推移

出典：『哲学雑誌』第25-44巻（1910-1929年）、『哲学研究』第1-14巻（1916-1929年）より
筆者作成

この図が示すとおり、フッサールに言及する論文数が、新カント派に言及する論文数を上回った年はこの期間には一度もない。リッカートのみと比較しても、フッサールに言及する論文がそれを上回るのは1927年がはじめてのことである。

1910年代の日本では、心理主義から立場を変えた西田と田辺以外に、桑木、朝永、左右田という留学からの帰国組がそろって新カント派の哲学を最新の哲学として論じるようになっていた。それに対して、フッサール現象学への肯定的評価は増えつつあったものの、新カント派よりフッサール現象学が優れていると明言している人物は、西田以外には見当たらない。そのことが原因となって、この時期の日本では、フッサールよりも新カント派の哲学のほうが関心を集めていたのだと考えられる。

2. 1920年代のドイツ留学事情

2-1. 1920年代のドイツ留学の再流行

高橋里美が言うフライブルク詣は、1920年代初頭にはじまる。それを生み出した大きな要因として、ドイツ留学の再流行を挙げることができる。

年度	総数	独	米	英	仏	スイス	墺	伊	他
1875-1879	28	6	9	11	6	0	1	0	1
1880-1884	28	24	3	6	2	0	4	0	1
1885-1889	24	11	5	10	1	1	2	0	1
1890-1894	27	22	2	5	9	0	1	1	2
1895-1899	128	109	19	29	34	2	16	5	10
1900-1904	177	147	39	69	52	3	8	5	14
1905-1909	181	161	89	102	63	3	5	8	11
1910-1914	175	152	91	98	47	4	9	9	6
1915-1919	268	39	249	172	112	97	1	19	21
1920-1924	727	596	621	572	380	117	31	87	71
1925-1929	781	628	675	272	144	32	44	196	91
1930-1934	353	273	265	95	52	15	8	132	57
1935-1940	271	211	177	33	49	11	1	59	36

表1 文部省留学生留学先別推移

出典：辻直人『近代日本海外留学の目的変容』（東信堂、2010年）、「表1-5 文部省留学生留学先別推移」（p.50）より転載。複数の国に留学している者がいるので、各国の人数と総数は一致しない。

上の表1にあるとおり、文部省から奨学金を経て留学した日本人の総数は、1890年代後半に増え、1920年代にさらに大きく増加する。その原因となったのは、高等教育機関の拡充と、それに伴う教員養成の必要性である。

日本では1890年頃から、中等教育拡大に伴って増加した高等教育機関への進学希望者に対応すべく、高等教育機関の新設が進められていた。その結果、1896年から1915年にかけて、高等工業学校や高等商業学校などの実業学校が合計16校創設されたほか、京都帝国大学（1897年）、東北帝国大学（1907年）、九州帝国大学（1910年）、第六高等学校（岡山、1899年）、第七高等学校（鹿児島、1900年）、第八高等学校（名古屋、1907年）が新設される³⁰。

1910年代後半からはさらに急激に官立の学校の増設が進み、総合大学では北海道帝大（1918年）と東京商大（現在の一橋大学、1920年）が、高等学校は1918年から1922年にかけて17校、実業学校は1920年から1925年にかけて27校が新設されて

30. 伊藤彰浩『戦間期日本の高等教育』、玉川大学出版部、1999年、244ページ。

いる³¹。これらの学校の教員を養成することを目的として、1890年代後半から、また1910年代後半から、大幅に留学生の数が増やされたのである。

文部省留学生の渡航先については、年によって多少の変動はあるが、最も人気があったのはドイツで、それに次ぐのがアメリカだった。1914年に第一次世界大戦が勃発し日本がドイツに宣戦布告したため、1910年代後半にはドイツへの留学生は激減する。しかし1919年に、講和条約が締結されて第一次世界大戦が終わる。さらに、巨額の賠償金を支払うためにドイツ政府が大量に外貨を買いはじめたことで、1921年からマルクの価値が暴落し、ドイツにいる留学生は安価で質の高い暮らしができるようになった³²。そのため1920年代には再びドイツが人気の留学先となる。

専門分野を西洋哲学に限定してもこの傾向は変わらない。

氏名	渡航先	留学地到着-留学満期	留学時所属・地位
井上哲次郎	独	1884.02.00 - 1890.03.00	東京大学助教授
大西祝	独	1898.04.07 - 1899.08.00	東京専門学校講師
桑木巖翼	独	1907.09.14 - 1909.09.14	第一高等学校教授、京都帝国大学
朝永三十郎	英仏独	1909.12.22 - 1912.12.22	(真宗大学教授) 京都帝国大学文科大学助教授
大島直治	米	1916.08.24 - 1918.08.24	第七高等学校造士館教授
岩下壮一	英仏	1919.10.14 - 1925.00.00	第七高等学校造士館教授
小山鞆絵	仏独	1921.04.00 - 1922.10.00	東北帝国大学
山内得立 ³³	英独仏米	1921.06.01 - 1923.06.01	東京商科大学
藤岡蔵六	仏独米	1921.09.20 - 1923.09.20	東京帝国大学哲学研究室副手 (東北帝国大学教授)
石原謙	独仏英	1922.04.01 - 1923.09.00	東京帝国大学助教授
田辺元	独仏米	1922.05.03 - 1923.12.01	京都帝国大学助教授

31. 同上、244-245 ページ。1915年からのこのように急激に官立学校の増設が進んだ理由として、伊藤彰浩は第一次世界大戦による国家財政の大幅な改善、藩閥官僚勢力に代わる政党勢力の政治的比重の増加、高等教育の拡充を求める世論の存在を挙げている(同上、21-22、30-31 ページ)。

32. 1922年7月にパリからベルリンに到着した阿部次郎は、そのときすでに通常の125分の1まで価格が下がっていたマルクが、一年足らずで35714分の1まで暴落したと記している(『阿部次郎全集』第7巻、角川書店、1961年、323 ページ)。

33. 山内得立は、語学を専攻する文部省留学生として1920年に留学地に到着したとの記録がある(辻直人『近代日本海外留学の目的変容』、東信堂、2010年、284 ページ)。

四宮兼之	独仏英米	1922.07.31 - 1924.07.31	第四高等学校教授
鹿子木員信	独希英米	1923.05.20 - 1926.03.30	九州帝国大学（東京帝国大学講師）
宮本和吉	英米独仏	1923.11.18 - 1925.09.18	新潟高等学校教授
加川航三郎	独英米	1924.03.29 - 1926.03.29	和歌山高等商業学校教授
高橋敬視	独英米仏	1925.05.27 - 1926.11.27	松江高等学校教授
高橋里美	独	1926.01.05 - 1928.01.05	東北帝国大学助教授
出隆	英独	1926.02.24 - 1928.02.24	東京帝国大学助教授
水島耕一郎	独	1927.04.00 - 1930.04.00	姫路高等学校教授
勝部謙造	独米伊	1928.04.28 - 1930.03.30	広島文理科大学助教授
楠本正継	独英支	1928.04.30 - 1930.03.30	九州帝国大学教授
岡野留次郎	独伊米	1928.04.30 - 1929.10.31	大阪高等学校教授
阿部晴之助	独伊米	1928.05.10 - 1929.11.10	第三高等学校教授
秋山範二	独伊米	1928.06.10 - 1930.06.10	彦根高等商業学校教授
藤井章	英独米	1929.05.13 - 1931.05.15	東京外国語学校教授
金山龍重	独	1929.05.28 - 1931.05.28	松江高等学校教授
矢崎美盛	独仏米	1929.06.30 - 1931.09.30	九州帝国大学助教授
中村克巳	独致(ママ)	1931.06.14 - 1933.09.14	九州帝国大学
杉正俊	独	1932.04.12 - 1934.07.12	記載なし
河瀬憲次	独伊米	1933.03.07 - 1935.03.07	広島文理科大学助教授兼 広島高等師範学校教授
川畑思無邪	独伊米	1934.03.31 - 1935.09.30	松山高等学校教授
坂崎侃	独伊米	1937.05.11 - 1939.05.11	東京文理科大学助教授
桑木務	独	1939.03.02 - 1941.03.02	九州帝国大学助手

表2 文部省哲学留学生一覧表

出典：辻直人『近代日本海外留学の目的変容』（東信堂、2010年）、「文部省留学生一覧表」（pp. 226-402）より、哲学もしくは哲学史を専攻としている人物を抜粋。ただし、中国哲学やインド哲学を専攻としている人物は省略した。

上記表2から見てとれるとおり、井上哲次郎、大西祝、桑木厳翼はドイツに留学し、朝永三十郎もドイツを含むヨーロッパに留学しているが、1910年代後半に文部省留学生としてドイツに渡航した哲学者はいない。しかし1920年代には文部省留学生の数が急増しており、そのほとんどがドイツを留学先の一つに選んでいる。

1920年代のドイツには、彼らのように文部省から資金を得て留学した者のほかに、

所属の組織などから資金を得て留学した者³⁴もいた。そのため当時のドイツには相当数の日本人留学生在がいたようで、1922年6月から1924年8月までドイツにいた三木清 (M1:412, M19:291) は、「その頃ドイツには日本からの留学生在が非常に多くいた」(M1:413)、「当時はそのようにドイツのたいていの大学町には日本人留学生在が多数にいた」(M1:419) と述べている。

そのように日本人留学生在が集まっていた大学の一例として、フライブルクのほかに、リッカートがいたハイデルベルクを挙げることができる。1923年10月までハイデルベルクにいた (M19:220) 三木は、そこで知り合った人として、羽仁五郎のほか大内兵衛、北吟吉、糸井靖之、石原謙、久留間鮫造、小尾範治、鈴木宗忠、阿部次郎、成瀬無極、天野貞祐、九鬼周造、藤田敬三、黒正巖、大峽秀栄の名を挙げている (M1:413)。哲学科卒業の人物に限定しても、北、石原、小尾、鈴木、阿部、天野、九鬼、大峽に三木を加えた9人がわずかな期間の間にハイデルベルクに来ていたことになる³⁵。

前章で明らかにしたように、1910年代後半の日本では新カント派の哲学が着目されていた。その新カント派のうち、1915年にヴィンデルバントとラスクが、1918年にコーヘンが亡くなっていたため、この時期にドイツに来た日本人留学生在は彼らのもとで学ぶことはできなかった。残る新カント派の哲学者のうち、日本で流行していたリッカートのもとに日本人が集まったのである。

2-2. フライブルク詣第一陣

同じころ、フッサールがいたフライブルクにも日本人哲学者が続々と来るようになっていた。『フッサール年代記』に日本人留学生在の記述がはじめて現れるのは1922年夏学期のことで、そこにはロツツェの『論理学』の演習に藤岡蔵六、伊藤吉之助、木場了本、小山軯絵、山内得立の5人が参加したとある³⁶。フライブルク詣の第一陣と考えられる彼らが日本を出発してからフライブルクに行くまでの足取りをまとめると、以下の表3のようになる。

34. たとえば木場了本は大谷派本願寺から留学資金を得ている（「彙報」『東亜の光』、第15巻第11号、1920年、50ページ）。

35. 羽仁は歴史学者、成瀬はドイツ文学者であり、大内、糸井、久留間、藤田、黒正は左右田の影響でリッカートのもとに来たと思われる経済学者である。

36. Karl Schumann, *Husserl-Chronik*, Den Haag, 1977, S. 259. なお、“Ryshon Kita”と表記されているのは木場了本のことだと思われる。

	出発日	途中滞在地	フライブルク到着
山内得立	1920.7.13 ³⁷	パリ (1920.10～)、ベルリン (1921.6～) ³⁸ 。 1921 年夏学期はベルリン大学聴講生 ³⁹ 。	1921.10.16 ⁴⁰
伊藤吉之助	1920.9.3/ 1920.11.5 ⁴¹	ベルリン (遅くとも 1920.12 はじめ～) ⁴² 、ハンブルク (1921.5～) ⁴³ 。1920/21 年 冬学期と 1921 年夏学期はベルリン大学 学生 ⁴⁴ 。	1921.10 末 ⁴⁵
木場了本	1920.10.19 ⁴⁶	ベルリン (1920.12.13～) ⁴⁷ 。	遅くとも 1921.10 末 ⁴⁸
小山鞆絵	1921.4.1 ⁴⁹	ベルリン (1921.6.9～)。到着直後にライ プツィヒ大学で聴講 ⁵⁰ 。 1921 年夏学期はベルリン大学に在籍 ⁵¹ 。	1921.10.13 ⁵²
藤岡蔵六	1921.7.31 ⁵³	記録見つからず ⁵⁴	遅くとも 1921.10 末 ⁵⁴

37. 「近事片々」『哲学雑誌』第 35 巻第 401 号、1920 年、688 ページ。

38. 西田幾多郎宛未公開書簡 (提供：石川県西田幾多郎記念哲学館) ID:O-441, O-319.

39. Rudolf Hartmann, *Japanische Studenten an der Berliner Universität 1920-1945*, Berlin, 2003, S. 164.

40. 同上、ID:O-367.

41. 『哲学雑誌』(第 35 巻第 401 号、1920 年、688 ページ) には 9 月 3 日出発、『東亜の光』(第 16 巻第 2 号、1921 年、60 ページ) には 11 月 5 日出発と書かれている。『哲学雑誌』の当該号は 7 月出版なので『東亜の光』の記述のほうが信憑性は高いが、当時は船でヨーロッパに渡っていたので、11 月に出発して 12 月はじめにベルリンに到着していたとは考え難い。

42. 「近事片々」『哲学雑誌』第 36 巻第 411 号、1921 年、525 ページ。

43. 「学界彙報」『哲学雑誌』第 37 巻第 420 号、1922 年、185 ページ。

44. Rudolf Hartmann, *Japanische Studenten an der Berliner Universität 1920-1945*, Berlin, 2003, S. 53.

45. 同上。

46. 「彙報」『東亜の光』第 15 巻第 11 号、1920 年、50 ページ。

47. 「てがみ」『懸葵』第 18 巻第 3 号、1921 年、53 ページ。

48. 「彙報」『東亜の光』第 17 巻第 1 号、1922 年、386 ページ。

49. 「近事片々」『哲学雑誌』第 36 巻第 411 号、1921 年、525 ページ。

50. 「彙報」『東亜の光』第 16 巻第 10 号、1921 年、70 ページ。

51. Rudolf Hartmann, *Japanische Studenten an der Berliner Universität 1920-1945*, Berlin, 2003, S. 73.

52. 「独逸通信」『思想』第 6 号、1922 年、100-101 ページ。

53. 「彙報」『東亜の光』第 16 巻第 9 号、1921 年、64 ページ。

54. 「彙報」『東亜の光』第 17 巻第 1 号、1922 年、386 ページ。

表 3 フライブルク詣第一陣留学行程

出典：筆者作成

日本を発った日には差があるが、彼らはおおよそ同じ頃にフライブルクに到着している。山内、伊藤、小山はベルリンなどに滞在したあと、1921年10月にそろってフライブルクに来ている。木場と藤岡がフライブルクに到着した正確な月日を示す資料は見つけられていないが、石原謙が同年10月26日付けの手紙で、この5人全員がフライブルクに行ったと伝えている⁵⁵。木場は1921年7月16日にはベルリンにいたと小山が伝えており⁵⁶、同年7月末に日本を船で出発した藤岡はフライブルクに直行したとしても到着は9月以降になるので、木場と藤岡も、フライブルクに来たのは1921年の10月かそれより少し前のことだと考えられる。さらに、小山が1921/1922年冬学期になされた「自然と精神」講義について面白いと書き伝えているため⁵⁷、他の4人もこの学期にすでにフッサールの講義等に出席していた可能性が高い。いわゆるフライブルク詣は、1921年の10月頃、もしくはこの冬学期に始まったとみていだろう。

この5人のうち、木場了本については情報が少なく、フッサール哲学との接点を示す文献は、管見の限り存在しない。1911年に東大を卒業した木場は⁵⁸、1915年にシュライアマハーの翻訳書『独語録』(*Monologen*, 1800)を出版し、1916年に「救济ということ」(『救济』第6巻第5号)、1919年に「救济事業の倫理的基礎に就いて」(『救济』第9巻第2号)を發表するなどしている。留学の目的は宗教哲学研究とされており⁵⁹、帰国後も「オットー教授の著 *Das Heilige* (『聖』)に就いて」(『仏教研究』第6巻第1号、1925年)という論文を書いているため、木場の関心はフッサールの現象学よりも宗教学もしくは宗教哲学にあったと考えられる。

小山鞞絵は木場とはやや異なり、帰国後に「自覚と弁証法」(『思想』第113号、

55. 「彙報」『東亜の光』第17巻第1号、1922年、386ページ。

56. 「彙報」『東亜の光』第16巻第10号、1921年、70ページ。

57. 「独逸通信」『思想』第6号、1922年、105、107ページ。

58. 『東京帝国大学一覧：従大正7年至大正8年』、東京帝国大学、1919年、234ページ。その後、1915年から真宗大谷大学教授(大谷大学図書館「木場了本先生・木場深定先生略年譜/木場深定先生業績/木場深定先生講義ノート[一覧](東北大学、大谷大学)」)『大谷大学図書館蔵木場深定先生寄贈図書目録』、大谷大学図書館、2007年、1ページ。2025年3月1日取得、<https://otani.repo.nii.ac.jp/records/8836>。

59. 「近事片々」『哲学雑誌』第35巻第402号、1920年、802ページ。

1931年。同第116号、1932年)⁶⁰など、フッサールにたびたび言及する論文を出している。しかし留学前は、1909年に東大を卒業⁶¹後、『哲学雑誌』上に批評紹介として「ベルグソンの「時間と自由意志」(第26巻第297-298号、1911年。第27巻第299号、1912年)や「オイケンの『新理想主義の哲学』を読む」(第28巻第319号、1913年)などを発表しているものの、フッサールに関連する論考は発表していない。フライブルクでフッサールと会ったときにマールブルク派に同情している旨を話したと自身で伝えているが⁶²、マールブルクではなくフライブルクを選んだ理由を述べた文献は見つかっていない。

藤岡は、小山よりはっきりと、マールブルク派への強い関心を示している。1916年に東大を卒業した藤岡は⁶³、1916年に「カントの「純粹理性批判」に現れたる「時間論」」(『哲学雑誌』第31巻第355-357号)、1918年に「認識の根拠」(同第33巻第382、384、387号)、1920年に「コーエンの思惟内容産出説と其の批評」(同第35巻第400、404、406号)などの論文を発表し、1921年にコーエンの『純粹認識の論理学』(*Logik der reinen Erkenntnis*, 2. Auflage, 1914)の訳を出版している。藤岡はフッサールの哲学にも一定の関心を寄せていたようで、同書の末尾に付された「雑録」でコーエンによるフッサール批判に言及し、両者のうちどちらが正しいかという問題については答えを保留している⁶⁴。しかしその「雑録」では、「余がマールブルヒに到着する頃に初めて此の訳書も世に現れるであろう。余は彼の地に於いて今は亡き著者を偲びつつその多くの学徒に接し親しく彼等の意見を聞き様々の疑問に関して教を乞いたいと思つて居る」⁶⁵と述べられている。藤岡は当初はマールブルクに行く予定で、なんらかの理由で行き先をフライブルクに変更したと考えられるのである。し

60. 小山鞆絵『自覚と弁証法』(岩波書店、1949年)に所収。

61. 『東京帝国大学一覧：従大正7年至大正8年』、東京帝国大学、1919年、234ページ。その後、1920年から東北帝国大学理学部講師、1923年から1946年まで東北帝国大学法文学部教授。「官報」第2391号、1920年、504ページ。『東北大学百年史』10、東北大学研究教育振興財団、2009年、399ページ。

62. 「独逸通信」『思想』第6号、1922年、102ページ。

63. 『東京帝国大学一覧：従大正7年至大正8年』、東京帝国大学、1919年、235ページ。その後、1917年から1921年まで東大哲学研究室の副手。留学前に東北帝国大学法文学部助教授に内定していたが取り消され(同大学理学部に勤めていた高橋里美が代わりに法文学部で哲学を担当)、帰国後の1924年から甲南高校教授(関口安義『悲運の哲学者』、イー・ディー・アイ、2004年、68-69、76、103-105ページ)。

64. コーエン『純粹認識の論理学』、藤岡蔵六訳、岩波書店、1921年、16-18ページ。

65. 同上、19-20ページ。

かしその理由については述べられていない。

1909年に東大を卒業した伊藤は⁶⁶、1912年の論文「最近の仏国哲学」(『哲学雑誌』第27巻第308-310号)のほか、1915年にはフッサールの論文の翻訳「フッサール「学としての哲学」」(„Philosophie als strenge Wissenschaft“, 1911. 『哲学雑誌』第30巻第343-356号)を、1916年にはナトルプの論文の翻訳「ナトルプ「カントとマールブルヒ派」」(„Kant und die Marburger Schule“, 1912. 『哲学雑誌』第31巻第349, 351, 354号)を発表している。そのため伊藤はフッサールとマールブルク派の双方に関心をもっていただけと考えられるが、当初はマールブルクに行くことを予定しており、のちにそれを変更したと述べている。

私は大正九年日本を出る時の予定では先ずマールブルクで一ヶ年位をナトルプの許にすぞす筈であった。ところが伯林に着いて二三ヶ月経った頃、…ナトルプ教授がやって来て或るギムナジウムで「タゴールと吾等」と云う講演があると云う記事を見出した。私はベルリンの地図をくり拡げて方位を見定め、其の夕早速会場に駆けつけた。…私に残った印象は「老衰」であった。私のマールブルク行きの決心は多少鈍らされた。…ハムブルクに出かけた序いでにカシラーを訪ねた時、ナトルプが米国に出かけるらしいと云う様な話を聞かされ又他の人からはマールブルクは独逸国民党の根拠地で外国人連合国に対しては好感をもたないなどと聞かされたので、一度はマールブルクを訪ねたいと云う心持ちは失せなかったが結局千九百二十一年の夏学期は予定を変えてハムブルクに行くことにしたのであった。…ハムブルクからフライブルクに転じて一年足らず、もう帰国の時も近づくので、…まだ見のこして居るマールブルクを訪れることが出来たのであった。⁶⁷

留学先の第一候補はナトルプのいるマールブルクだったが、ナトルプが老衰しており、アメリカ滞在を予定していること、マールブルクでは戦勝国出身の外国人は歓迎されないことなどから、そこで学ぶことに問題があると判断し、予定を変えてフライブルクに行くことを決めたというのである。

残る山内は、以下で述べられているように、留学前から新カント派よりフッサール

66. 『東京帝国大学一覧：従大正7年至大正8年』、東京帝国大学、1919年、234ページ。1917年から慶応大学で教員を務め、1929年から同大学講師(『慶應義塾150年史資料集』2、慶應義塾、2016年、138-139ページ)。

67. 伊藤吉之助「ナトルプの追憶」『哲学雑誌』第39巻第454号、1924年、1028-1029ページ。

の哲学に関心を抱いていたようで、以下のような回想をしている。

私の此の国に於いて哲学を学び初めた頃は新カント学派の盛んなりし時代に属していた。…かかる時代にあつてカント学派とは全く異なりたる思想系統のあることを教えられ、それが我が国の哲学界に於いても何等かの資するところあるべきを思い、主としてこの学派即ちボルツァノの知識学、マイノングの対象論、ブレンターノの心理学及びフッセルの現象学等の研究に従事した。…例えばブレンターノの心理学に於いて見らるる如く豊富なる体験に基礎を置いて居るものを見出すことに於いて多くの喜びを私は感じた。⁶⁸

山内が京都大学を卒業したのは1914年のことである⁶⁹。この時期の日本では新カント派が注目を集めていたため、山内も1916年にリッカートの『認識の対象』(*Der Gegenstand der Erkenntnis*, 2. Auflage, 1904)と「認識論の二つの道」(„Zwei Wege der Erkenntnistheorie“, 1909)を訳出しているほか、1919年には「新カント派の哲学」(『六條学報』第208号)という論文を発表するなどしている。一方、西田幾多郎は同時期の1915年度に「ボルツァノ及ブレンタノよりフッセル迄」と題された講義を行い⁷⁰、山内が筆記を担当した講演をもとに(N12:5)、「ブレンタノ学派」という章を含む著作『現代に於ける理想主義の哲学』を1917年に出版している。その西田から「カント学派とは全く異なりたる思想系統のあることを教えられ」と思われる山内は、1916年に論文「ボルツァノの哲学」(『哲学研究』第1巻第4号)を、1918年にはマイノングの哲学に言及した論文「高次の対象」(『哲学研究』第3巻第8号)を発表している。そのため、山内がフッセルのいるフライブルクを留学先として選んだのは自然なことと言える。

以上のように、1921年秋にフライブルクに集まった5人のうち、日本を出発する前からフライブルクを第一候補としていた可能性が高いと考えられるのは山内のみである。木場の研究は現象学との接点がない。藤岡と伊藤は当初マールブルクに行くことを予定しており、小山もマールブルク派に関心を寄せていた。伊藤は、目当てにしていたナトルプが老衰しておりアメリカに滞在する予定があるという消極的な理

68. 山内得立『体系と展相』、弘文堂、1937年、2-3ページ。

69. 「彙報」『芸文』第5年第7号、1914年、83ページ。「官報：1914年11月28日」第698号、1914年、612ページ。その後、東京商科大学（一橋大学）助教授などを経て、1931年から京都帝国大学教授（山内得立『随眠の哲学』、燈影舎、2002年、314ページ）。

70. 「彙報」『芸文』第6年第10号、1915年、114ページ。

由で、フライブルクに行き先を変更した。藤岡と小山はこの情報を共有して、伊藤と同じくフライブルクに行くことに決めたものと推測される。

彼らからわずかに遅れて、1922年3月に日本を出発した田辺元（T15:480）とベルリン滞在時に会った心理学者の千葉胤成は、田辺に「フライブルグで勉強するつもりだが」といわれたので、私は何気なく「日本の哲学者は皆フライブルグに行くようですね」といったのをいたく気にされ、「私は現象論を理解するためです」と、敢えて流行を逐うのではないことを示された⁷¹と回想している。この二人のやりとりからは、フライブルクに行く日本人哲学者は単に流行を追っかけている者ばかりで、現象学を真剣に学ぶ意志がある者はわずかしかない、と認識されていたことが読み取れる⁷²。フライブルク詣第一陣の5人のうち、山内以外は現象学より他の哲学に強い関心を寄せていたという事情が、このような認識を広めたのだと考えられる。

結

日本の哲学界では1898年から実証主義・心理主義的な認識論が支持を広げていたが、1911年からは反心理主義的な立場が支配的になっていき、フッサールはその反心理主義的な立場を採る哲学者として受容されはじめる。しかし1910年代の日本では、新カント派に注目が集まっていた。西田や田辺がカント主義を支持するようになったことに加え、留学から帰国した桑木、朝永、左右田がそろって新カント派について論じたことがその原因だと考えられる。フッサールの現象学も西田によって評価され、田辺らによってその意義が認められるが、新カント派と比べるとその広まりは限定的だった。

そのため、フッサールのいるフライブルクに来たはじめの5人のうち、新カント派よりフッサール現象学に関心を抱いていた人物が山内しかいなかったのは不思議なことではない。1920年代の日本では、高等教育機関を拡充する政策が採られ、そ

71. 千葉胤成「田辺さんの思い出」『田辺元全集』第11巻月報、1964年、1ページ。

72. もともとマールブルク派に関心を寄せていた伊藤、小山、藤岡がマールブルク行きを断念したあと、カッシーラーのいるハンプルクには伊藤が短期間滞在したのみで、リッカートのいるハイデルベルクにも行かず、フッサールのいるフライブルクを全員が選んだ理由ははっきりしない。だがこの千葉の証言をもとにするなら、彼らがフライブルクに行った理由は、当時のドイツでの現象学の評判を知り、それが流行していたこと聞きつけたから、ということになるだろう。

の教員を養成する必要があったこと、第一次世界大戦が終結し、マルクが暴落したことを要因として、ドイツに留学する学生が急増した。加えて、マールブルク派に強い関心を抱いていた日本人が、ナトルプの老衰などを理由にマールブルクを選択肢から外した。1910年代の日本では徐々にフッサール現象学への関心が高まりに加え、そのような偶然的で外的な要素が積み重なったことで、1921年秋にフライブルク詣がはじまったのである。

ただし、1920年代には日本でさらに現象学の紹介が進んでいる。そのため、彼ら5人のあとにフライブルクに集まった日本人留学生たちは、その多くが出発前からフッサール現象学に強い関心を抱いていたものと思われる。その正確な事情やフライブルク詣の成果については、別の機会に発表させていただくことにしたい。

凡例

- ・西田幾多郎の著作からの引用および参照は、西田幾多郎『西田幾多郎全集』（岩波書店、2002-2009年）から、(N 巻号:ページ) というかたちで引用元・参照元を示して行う。
- ・田辺元の著作からの引用および参照は、田辺元『田辺元全集』（筑摩書房、1963-1964年）から、(T 巻号:ページ) というかたちで引用元・参照元を示して行う。
- ・三木清の著作からの引用および参照は、三木清『三木清全集』（岩波書店、1966-1986年）から、(M 巻号:ページ) というかたちで引用元・参照元を示して行う。
- ・旧漢字・旧仮名遣い等はすべて現代のものに改めた。

参考文献

西田幾多郎宛未公開書簡（提供：石川県西田幾多郎記念哲学館）ID:O-319, O-367, O-441.

『哲学雑誌』第25-44巻、1910-1929年。

『哲学研究』第1-14巻、1916-1929年。

「彙報」『芸文』第5年第7号、1914年。

「彙報」『芸文』第6年第10号、1915年。

「彙報」『考古界』第8編第12号、1910年。

- 「彙報」『東亜の光』第8巻第2号、1913年。
- 「彙報」『東亜の光』第12巻第10号、1915年。
- 「彙報」『東亜の光』第15巻第11号、1920年。
- 「彙報」『東亜の光』第16巻第2号、1921年。
- 「彙報」『東亜の光』第16巻第9号、1921年。
- 「彙報」『東亜の光』第16巻第10号、1921年。
- 「彙報」『東亜の光』第17巻第1号、1922年。
- 「海外通信」『哲学雑誌』第37巻第428号、1922年。
- 「学界彙報」『哲学雑誌』第37巻第420号、1922年。
- 「官報」第2391号、1920年。
- 「官報」第698号、1914年。
- 「近事片々」『哲学雑誌』第29巻第323号、1914年。
- 「近事片々」『哲学雑誌』第35巻第401号、1920年。
- 「近事片々」『哲学雑誌』第35巻第402号、1920年。
- 「近事片々」『哲学雑誌』第36巻第411号、1921年。
- 「雑録」『哲学雑誌』第23巻第262号、1908年。
- 「雑録」『哲学雑誌』第24巻272号、1908年。
- 「新著」『哲学雑誌』第7巻第70号、1892年。
- 「新著」『哲学雑誌』第8巻第75号、1893年。
- 「てがみ」『懸葵』第18巻第3号、1921年。
- 「独逸通信」『思想』第6号、1922年。
- 阿部次郎『阿部次郎全集』第7巻、角川書店、1961年。
- 伊藤彰浩『戦間期日本の高等教育』、玉川大学出版部、1999年。
- 伊藤吉之助「フッサール「学としての哲学」」『哲学雑誌』第30巻第343-356号、1915年。
- 伊藤吉之助「ナトルプの追憶」『哲学雑誌』第39巻第454号、1924年。
- 上野直昭「ヴント『心理学に於ける論理主義』」『哲学雑誌』第30巻第339号、1915年。
- ウィンデルバンド『哲学史要』、桑木巖翼抄訳、早稲田大学出版部、1902年。
- 大谷大学図書館「木場了本先生・木場深定先生略年譜/木場深定先生業績/木場深定先生講義ノート[一覧]（東北大学、大谷大学）」『大谷大学図書館蔵木場深定先生寄贈図書目録』、大谷大学図書館、2007年。2025年3月1日取得、<https://otani.repo.nii.ac.jp/records/8836>。

- 大橋容一郎「新カント学派と近代日本」『思想』1118号、2017年。
- 小山鞆絵『自覚と弁証法』、岩波書店、1949年。
- 加藤哲郎『ワイマール期ベルリンの日本人』、岩波書店、2008年。
- 紀平正美『認識論』、岩波書店、1915年。
- 桑木巖翼「欧米哲学界の印象」『教育学術界』第20巻第6号、1910年
- 同『哲学綱要』、東亜堂書房、1913年
- 同『カントと現代の哲学』、岩波書店、1917年。
- 同「外遊旅行談」『哲学雑誌』第42巻第483号、1927年。
- 同「日本に於ける独逸哲学」『西周の百一新論』、日本放送出版協会、1940年。
- 慶應義塾150年史資料集編集委員会編『慶應義塾150年史資料集』2、慶應義塾、2016年。
- 小尾範治「輓近の独逸哲学」『哲学雑誌』第29巻第329号、1914年。
- コーエン『純粹認識の論理学』、藤岡蔵六訳、岩波書店、1921年。
- 関口安義『悲運の哲学者』、イー・ディー・アイ、2004年。
- 左右田喜一郎『経済哲学の諸問題』、佐藤出版部、1917年。
- 高橋里美『高橋里美全集』第4巻、福村出版、1973年。
- 高橋里美『高橋里美全集』第7巻、福村出版、1973年。
- 千葉胤成「田辺さんの思い出」『田辺元全集』第11巻月報、1964年。
- 千葉命吉「新生動主義とは何ぞや」『教育学術界』第48巻第2号、1923年。
- 辻直人『近代日本海外留学の目的変容』、東信堂、2010年。
- 東京帝国大学編『東京帝国大学一覽：従大正7年至大正8年』、東京帝国大学、1919年。
- 東北大学百年史編集委員会編『東北大学百年史』10、東北大学研究教育振興財団、2009年。
- 得能文「現代の哲学」『教育学術界』第34巻第6号、1917年。
- 朝永三十郎『哲学綱要』、宝蔵館、1902年。
- 朝永三十郎『独逸思想と其背景』、東京宝文館、1915年。
- 朝永三十郎『近世に於ける「我」の自覚史』、東京宝文館、1916年。
- 中谷延治解説『ナトルプ氏へるばると、ペすたろっち』、育成会、1900年。
- 波多野精一「十九世紀の独逸哲学大家」『哲学雑誌』第60巻第175号、1901年。
- 浜渦辰二「日本哲学史におけるフッサールの受容」『日本哲学史研究』第18号、2022年。
- 藤井健治郎「テレオロジーの可能及び意義に就いて」『哲学雑誌』第25巻第255号、

1908年。

円谷弘『社会学徒の描く世界』、社会学徒社、1928年。

満原健「西田幾多郎の純粹経験概念と実証主義の認識論」『哲学研究』第610号、2023年。

同「明治期の日本における桑木巖翼の認識論」『求真』第28号、2023年。

同「西田幾多郎『善の研究』と田辺元「措定判断に就いて」」『求真』第29号、2024年。

宮本和吉「最近独逸哲学の趨勢」『哲学雑誌』第27巻第301-302号、1912年。

同「マールブルヒ学派とハイデルベルヒ学派」『哲学雑誌』第28巻第320号、1913年。

山内得立『体系と展相』、弘文堂、1937年。

山内得立『随眠の哲学』、燈影舎、2002年。

リッケルト『認識の対象』、中川得立訳、岩波書店、1916年。

Ewald, Oscar, “German Philosophy in 1913”, in *The Philosophical Review*, vol. 23, No. 6, 1914.

Hartmann, Rudolf, *Japanische Studenten an der Berliner Universität 1920-1945*, Berlin, 2003.

Husserl, Edmund, *Briefwechsel*, 10 Bände, Dordrecht/Boston/London, 1994.

Mitsuhara, Takeshi, “The Rise of Japanese Phenomenology”, in *European Journal of Japanese Philosophy*, vol. 10, 2025

Rickert, Heinrich, „Zwei Wege der Erkenntnistheorie“, in *Kant-Studien*, Band 14, 1909.

Schumann, Karl, *Husserl-Chronik*, Den Haag, 1977.

Tani, Tōru, “Japanese Phenomenology”, in *The Oxford Handbook of Japanese Philosophy*, edited by Bret W. Davis, Oxford, 2019.